

●事例紹介●

鹿児島純心女子短期大学における
体験型英語教育の取組

～全寮制と海外研修を活用し、モティベーション
を高める実践的カリキュラム～

堀江 美智代

(鹿児島純心女子短期大学教授)

一 はじめに

鹿児島純心女子短期大学は、昭和三五年（一九六〇年）、鹿児島県内初の私立短期大学として創立された。キリスト教的ヒューマニズム「愛と奉仕の精神」を実践することを教育理念とする。すなわち、高度な専門的能力の習得とともに、豊かな人間性を兼ね備えた女性を育成するという全人教育を目的とし、女子の高等教育の発展に尽くしてきた。昭和五四年（一九七九年）本学英語科を設置した目的は、実践的な英語コミュニケーション能力を持ち、広く国際社会で活躍できる人材を育成することであった。そのために、全員に英語学習者での生活と海外研修を義務づけ、全人的に英語を学ぶ環境を構築した。

本取組「体験型英語教育」は、英語学習者、海外研修お

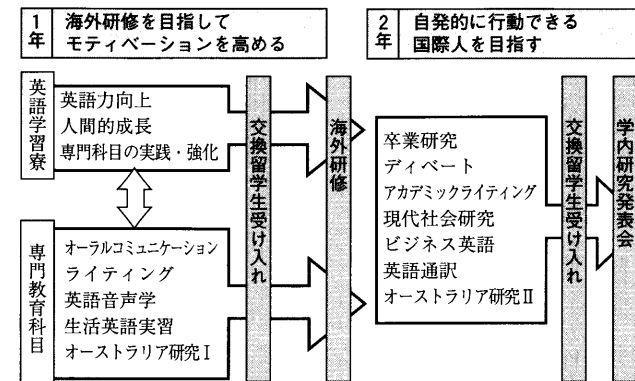
よび交換留学生の受け入れという体験と、本学の専門教科目との結合の強化により、学生の「モティベーション」を向上させ、教育効果を高めることを目的とする。ここでいうモティベーションとは、①英語学習への意欲、②英語を使ってコミュニケーションをとろうとする意欲、③学びを通して国際的視野を拓け、豊かな人生を開拓しようとする意欲を意味する。

二 本取組の特色と概要

英語コミュニケーション能力を育成するためには、理解できるインプットを多く与え、アウトプットの間を充実させることが必要である。ところが、学習に対する意欲や自信の欠如があると、インプットは学習者の中に深く入らず、また意欲的なアウトプットの妨げとなる。そこで本取組は、

英語教育を知的な面のみならず、情意面も含めた全人教育として捉え、体験重視の実践的プログラムを実施している。図に体験型英語教育の内容と連関を示す。第一に、英語学習寮（一年次全寮制）は、専門教育科目の学習を強化し、学習と生活の両面から学生を支援して、「海外研修へ向けてモチベーションを高める」場である。第二に、一年次の終わりに実施される約一か月の海外研修は、一年間で習得した英語力と寮生活で培った人間性が総合的に開花する短期留学の場である。そして、「自発的に行動できる国際人を目指す」というさらに大きな目的に向かう契機

図 体験型英語教育の内容と連関



的に向かう契機とする。第三に、交換留學生の受け入れ等の英語体験とそれを活用する実践的な専門教育科目との結合を強め、英語を使用する機会と個に応じた指導を充実させる。このように本取組は、学生のモチベーションを高めるために、計画的かつ発展的に組織されており、英語運用能力の向上と人間的な成長という教育効果を上げている。

三 体験型英語教育の実施状況

(一) 英語学習寮（全寮制）

一年生全員（約九〇名）が、キャンパス内にある寮で、外国人教員二名との共同生活を一年間体験する。朝六時起床、夕方六時門限、一〇時消灯という規律正しい共同生活を通して、自主的かつ計画的に行動する能力や社会性・協調性を身につける。放送・掲示等すべてが英語で



英語学習寮（外国人教員との食事風景）



海外研修（各提携校へ少人数派遣）



交換留學生の受け入れ（学生が担当する茶道の授業）

の提携校で現地の学生と共に学習し、一人ずつホームステイをすることにある。また、各提携校にできる限り少人数（一名から八名程度）を派遣する方針を、当初から貫いている。それは、少人数で学ぶことにより日本人同士で日本語を使うことを避け、自主的に英語で考え行動することができるようになるためである。また、研修中は引率教員四名が各都市を巡回し各校を訪問するとともに、学生に問題が生じた場合は速やかに対処できる体制をとっている。

(三) 交換留學生の受け入れ

毎年一月から二月にかけて、オーストラリアの提携校から約三〇名の留學生を受け入れ、本学の学生とその家族がホストファミリーを務めている。海外研修の事前事後学習として、学生自らが留學生を対象とした日本文化・日本語の授業を担当することにより、モチベーションを高める役割を果たしている。

(四) 体験と専門教育科目との結合

前述した三つの体験と専門教育科目を結合した事例を一つ挙げる。二年次必修科目の「卒業研究」で「日本語教授

行われ、English Marathon Day、ゲストスピーカーによる講話、異文化行事体験などを通して、英語を使用する機会を充実させている。また、寮はすべて個室で、各部屋から学内LANに接続可能である。

(二) 海外研修

一年生全員が、春休みの約一か月間、オーストラリアで短期留学を体験する。第二三回の二〇〇四年度は、七都市二三校において八三名が研修を行った。その特色は、現地

法」を選択した学生は、まず、海外研修前にオーストラリアでの日本語授業見学について事前指導を受ける。オーストラリアでは、日本語の授業を見学し、教員のアシスタントを務める。研修から帰国後、指導案作成・模擬授業を行い、留学生受け入れプログラムで日本語の授業を担当する。一月に、すべてを英語でまとめて卒業論文を提出する。このように、海外研修と交換留学生の受け入れという体験を活用し、専門教育科目と結びつけることで学生に目的を持たせ、モチベーションを高めている。

四 教育効果

本取組の教育効果は、外部検定試験および本学独自のオーラルテスト、学生の授業評価と意識調査、教員の自己点検評価および卒業生の進路状況と意識調査を用いて、多角的に評価している。調査結果の一部を以下に示す。

(一) 実践的英語運用能力の測定

① 外部検定試験

英語運用能力の向上を客観的に測定するために、本学では学生全員に対して、在学中三回（入学時、海外研修後、卒業時）のTOEIC受験を義務づけている。平成一六年度卒業生は、入学時の平均点は三一九点、海外研修後は三八八点、卒業時は四三九点と確実に点数を伸ばし、二年間の

伸長は平均一二〇点であった。これは、四年制大学の四年間の伸び一〇三点（TOEIC運営委員会の二〇〇三年資料による）をはるかに上回る。また、英語検定の受検を推進し、入学時はほとんどの学生が未取得の二級を、卒業時まで七四％（過去五年間の平均）の学生が取得している。

② 本学独自のオーラルコミュニケーション試験

発信型英語コミュニケーション能力を測定するために、在学中計五回、学生全員に本学独自のオーラルテストを実施している。テストの様子はすべて録音・録画し、フィードバックを与え、学生が英語を使おうとするモチベーションを高めている。テストでは全教員が面接官となり、学生の英語力を直に把握し、オーラルテストの充実や授業改善に取り組んでいる。本取組の結果、入学時は五点満点で一、二点しかとれない学生が、卒業時に三、四点取れるようになった。

(二) 本取組に関する学生の評価

「体験型英語教育」の意義と問題点を評価・改善していくために、在学生、卒業生、教員に対し、平成一五年度にアンケート調査を実施した。各アンケートの調査内容とその結果は、『平成一五年度英語科自己点検報告書』（本学教育プログラム活性化委員会編）に掲載されている。

アンケートに共通質問項目を設け比較した結果、英語学

習寮、海外研修、専門教育科目のすべてが「英語学習への意欲」を強く高めていることがわかった。特に、海外研修に参加した学生は全員が、「英語学習に対する意欲が増した」と回答している。寮生活に関しては、「一年間寮生活を送ったことは良かった」と答えた学生が九〇％にのぼる。また、英語科で二年間学んだことよって「卒業後も、もっと英語を勉強したい」とする学生が九〇％近くに上り、モチベーションの向上が明らかにみられた。

(三) 卒業生の進路および評価

語学を生かせる職場を希望し、航空業界を含む運輸・交通、金融、サービス業等の企業に就職する学生が多い。平成一六年度卒業生の就職率は、三月末現在九五％を超えている。

平成一五年度、本学科卒業生五〇〇名（全卒業生二〇三七名から任意抽出）に三項目にわたるアンケート調査を実施した。本学英語科で身に付けた英語力が「職場で役に立った」とする卒業生が九〇％に達し、本学英語科で学んだ満足度は一〇〇％に近い。英語力向上と人間性の向上という点で有益であったとほぼ全員が回答している。

五 おわりに

過去二五年間の実績が評価され特色GPに採択された

が、本学の英語プログラムは常に進化していかなくてはならないと考えている。平成一六年度から大学改革推進事業を申請し、新たな取組を開始した。まず、学生の自主学習環境を整備するためにe-Learningシステムを導入した。英検・TOEIC対策のコンテンツを利用して、外部検定試験に備え、英語力向上を図っている。また、英語学習寮にVID端末を二〇台設置し、寮でもこのコンピュータを活用して、宿題、レポート作成、検定試験対策などの英語学習に役立てている。

さらに、イングリッシュ・ラウンジを今年四月に開設した。明るい室内に座り心地の良い椅子やソファ、英字新聞・英文雑誌を備え、学生同士または教員とリラックスして英語を使う場として利用されている。ここでの会話はすべて英語と決められており、学生が掃除する際にも英語を使っている。他にも、ゲストスピーカー・ラーニングアドバイザーを活用した指導を行い、一二月には英語教育シンポジウムを開催する予定である。

今後、本学の体験型英語教育をさらに充実し、学生のモチベーションを高め、実践的英語運用能力と豊かな人間性を備えた国際人を育成していきたいと考えている。取組の詳細については、本学ホームページ (<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/GP/>) をご覧頂ければ幸いです。